

虚子の俳論

——『俳句に志す人の為に』を中心にして——

倉 田 紘 文

高浜虚子の小論『俳句に志す人の為に』は、俳誌「ホトトギス」の昭和六年新年号（第三十四卷第四号）に掲載されている。それはその号で『俳句初学者の為に』と題されて特集された十八篇の中の一編で、『消息』によると「東京日々新聞紙上に連載せしものなるが、読者の希望ありたるため、転載致し候」とあり、更に「一月一日のつもりにて十二月一日 虚子記」と書かれている。そのことから考えればこの小論は昭和六年の俳句界への虚子の姿勢ととれなくもない。

長い年月の間の虚子の多くの俳論の中から、私がかこ

て昭和六年の『俳句に志す人の為に』に焦点を合わせたことについては二つの理由がある。一つは虚子がこれまで推しすすめて来た「客観写生」「花鳥諷詠」の俳句理念が、その頃虚子自身の心の中で整理され集成されたと思えることからである。その自信への心の過程は次の二つの文にうかがうことが出来る。

「俳句のみならず、文章でも小説でも私は私の好むところのものが一番正しいのだといふ信念はその頃から起った。その考へは四十を過ぎて動揺しなくなった。『誰でもやって来い』といふやうな自恃の心が強くなった。その頃作った句に

春風や闘志抱きて丘に立つ 虚子

霜降れば霜を楯とす法の城 同

といふのなどがあつたことを記憶している」（『霜を楯とす』S 2・12、「虚子全集」第七巻）

この内容は新傾向を唱えて相対していた碧梧桐との関係を遠く回想してつづられたものではあるが、その心には今再びの闘志が蔵されていたのにちがいない。それは次の

「現今の俳句界の諸流派の傾向などといふことは全く私には分らない。私から見ると、私の主張に反した主張をして居るところの諸君は、俳句が本當に分つてゐないのだと考へてをる。諸君は遙かに私達の後の方を歩んでゐるのだと思ふ。斯んなことをいふと、空威張をしてゐるやうで聞きづらいかも知れないが、三十四五年俳句界を歩いて来て、今日になつた私から見ると、實際そんな風に見えるのである。（『雨の日』S 4・5、「虚子全集」第七巻）

ではつきりとした言動に表われて来ているのである。しかもその前後の啓蒙的な俳論活動には目をみはるものがあり主立ったものだけでも

- 「写生といふこと」（T 13・6、T 14・9）
- 「俳句小論」（T 15・7、T 15・12）
- 「花鳥諷詠」（S 3・6、大阪毎日新聞講演会）

○「写生の話」（S 3・8）

○「俳句とはどんなものですか」（S 3・9）

○「現代の俳句」（S 3・10、放送）

○「秋桜子と素十」（S 3・11）

○「写生」（S 4・1、福岡に於ける関西俳句大会席上講演）

○「俳諧趣味」（S 4・2）

○「花鳥諷詠（再び）」（S 4・2）

○「写生主義」（S 4・2）

○「街頭に出て法を説く」（S 4・4、三菱講演会に於て）

○「写生俳話一則」（S 4・8）

○「古壺新酒」（S 5・11）

等を上げることが出来るのである。この打ち寄せる波のような虚子の一つ一つの論や講演がそのまま自ら自信となつていった事は疑いない。

他の一つは、その年の十月に水原秋桜子が『自然の真と文芸上の真』の論を『馬酔木』に発表して「ホトトギス」を離脱したことにある。それは単に「ホトトギス」の有望作家が一人脱退したということではなく、「ホトトギス」の主張に反発して「主観の尊重」を大きく打ち

出したのであり、いふなれば虚子に真向うから対立しての脱退である。そしてそれはやがて新興俳句運動へと発展して行くのである。秋桜子が「ホトトギス」を離れることになった大きな契機は、「客観」「主観」に関する虚子の『秋桜子と素十』の「ホトトギス」昭和三年十一月号の一文である。

「文芸には常に二つの傾向がある。一つは心に欲求しておる事、即ちある理想を描き出そうとするもの。一つは現実の世界から自分の天地を見出すもの。という二つである」。「前者の現実の天地を眼中に置かずに、空想世界の自分の好む天地を描き出そうとする作句態度を取っているのが秋桜子である」。「後者はそういう空想をほしいままにせず、現実の天地の中から作者の好む小天地を見出そうとするのである。この作句態度を取っているのが素十である」。「厳密なる意味に於ける写生という言葉は、この素十の句の如きに当てはまるのだといえる。」

この見解は「客観写生」をすすめようとする虚子にしてみれば当然のことであつたのであろうが、この二人の作風に関する論が再び昭和六年三月号の「ホトトギス」に扱われたのである。それは新潟から出されている俳誌「

まはぎ」(昭和5・7月号)に載つた「句修業漫談」副題「秋桜子と素十」が虚子の意により転載されたのである。内容は、中田みづほと浜口今夜(共にホトトギス俳人)の対談であるが、先の虚子の一文と同様に客観写生俳句の立場から素十俳句を優位に置いているものである。それに対して

「私は『秋桜子と素十』を読んで、あまりの無理解に腹がたつたから、反駁文を書かうと思つたが、事は地方雑誌「まはぎ」に起つたものであり、且つみづほは東大俳句会の先輩であることを考へて我慢してしまつたけれど、「句修業漫談」がホトトギスに連載されたこの一項もまた載ることになれば、私はホトトギスを去るか、或は馬酔木誌上に駁論を書くか、とる道は二つの他にないと思つた」(「高浜虚子」水原秋桜子、文芸春秋新社・S 27・12刊)

と秋桜子は当時のことを回想している。そして、「馬酔木」に「自然の真と文芸上の真」を発表し、かつホトトギスを去つたのである。

「ホトトギス」の中から敢えて有力作家を失いながらも、自分の信じる俳句理念をより確かなものとしていつたその集成が、昭和六年一月号の『俳句を志す人の為』に

にまとめられていると思うのである。

明治四十五年七月号の「ホトトギス」にしばらく中止されていた『雑詠欄』を復活させて虚子は再び俳壇に帰って来た。その号の消息に

「小生は数年前散文に赴きたるもの一人に候。而も俳句に立戻る場合には比制約を厳守せんとす。」

とある。ここに言う制約とは俳句はあくまでも十七字の詩という意である。一度俳壇に復帰した虚子は先にも述べた

春風や鬪志抱きて丘に立つ 虚子

の意気を持ち、自ら守旧派と言いながら、十七字・季題という二大約束を墨守し「花鳥諷詠」「客観写生」の下に俳句を進めたのである。そこでこの小論ではそれら虚子の掲げた主張が『俳句に志す人の為』の中にどう述べられているかを調べてみようと思う。

④ 十七字

○「俳句は十七字の詩であります。十七字といふのは詳しくいふと五七五の三つに別れます。五字と七字は調子に乗った日本語の基調であります」

○「近来十七字の形を故意に破壊したものを俳句と呼んでゐるものがありますが、それは採りません。」

俳句の字数について正岡子規は「三十一字の和歌十七字の俳句は古来より言ひ古して大方は陳腐に属し熟套に落ちし今日、少くとも三十二三字又は十八九字の新調を作るの必要を見る。余は向後先ず比一点より漸次陳套を脱せんとするの志あり」(M 27 「字余りの和歌俳句」)と言ひ、それは「十八九字の俳句を十八・九字の新体詩といつてもよい」(M 29 「俳句の問答」)と修正され、最後には「他の文学と区別すべき特色は五七五の調子に在り」(M 30 「五七五の調子は実に俳句の最大要素なり」) (M 30 「明治二十九年の俳諧」)と定型を説いている。その子規の意を受けた虚子は「俳句入門」(M 31)の冒頭に「俳句は其形式の上に十七字といふ制限こそあれ……と十七字については何ら疑うこともなく受け入れている。そしてその考えは終生變つていない。」

・「俳句は十七字の文学であります」(T 3 「俳句とはどんなものか」)

・「十七字といふのは、俳句が先天的に性質づけられた處の形で」「俳句はどこ迄も十七字といふ鉄則を

守るべきであります」(S12・11「俳話六則」)

・「季題と五・七・五といふ事は俳句にとつて先天的のもの。さういふ運命を担つて俳句は生れて来た」

「いやでも応でも五・七・五(十七字)にしなければ、といふ使命の下に俳句作者は置かれた」(S32・

8「虚子俳話」)

このように何時の論を見ても一貫して定型を肯定している。「先天的のもの」更には「さういふ運命を担つて俳句は生まれた」と全く理屈扱きの主張であるが、その源は「五字七字は調子に乗つた基調」であり「五七五と結びついてはじめて一個の詩の形とな」るのであるといふ論であらう。

(四) 季題

○俳句には季題といふものがあります。

○詰まり、春、夏、秋、冬を現すべき時候のものであります。

○俳句は季題に重きを置く詩でありまして、畢竟季題を主題として詠ずる詩であるといつていいのであります。

発句を俳句として独立させた子規に於ては勿論のこと、

虚子も又その季題についてはそれがあまりにもあたり前の事と捕えられていたためか論は少ない。「俳句に季なからざるべからざるは、尚ほ絵画に色なからざるべからざるが如し。厳格なる意味に於て、吾人は季を外にして、天然の風光に接すべくもあらず」(M31「俳句入門」)が見られる位である。しかし、明治四十四年四月新傾向派機関誌「層雲」が創刊され、荻原井泉水の「季題無用論」等が表に出はじめるとすぐに「(俳句の)其主なるもの一二をいへば、季題趣味、十七字といふ字数の制限、詩らしき調子はなり」(M45・7「消息」)と季題趣味を取り上げ、それは又、「季題趣味の破壊とふ事も文芸上の一面の事業としては私は之を認めます。併し其は同時に俳句の破壊であることを考へ無ければなりません」(T1・12「俳句入門」)となり、俳句に不可欠のものとして強く主張している。この季題についての虚子の意見も、先の十七字の定型説と同様に一貫して変わらぬ論である。

・俳句には必ず季のものを讀込みます。(T3「俳句とはどんなものか」)

・「季題といふものは春夏秋冬、四季の種々の現象をいふのであります、俳句では其現象を大變大事なも

のとして取扱ふのであります」「そうして何等か心に衝動が起つて来れば、この季題の一つに担つて諷詠すべきであります」(S 12・10「俳話六則」)

従来季題といふものがつきまとふてゐるのは、何かさうしなければならん理由があるのだからか。あると思ふ。併し假にこれは偶然の事だと考へてもよろしい。假に偶然の事から季題は俳句より離れる事が出来なくなつたとしても、それは俳句の特性として尊重すべき事実である(S 30・4「虚子俳話」)

・私は俳句は季題の詩として今後も育てて行く事に安心と誇りを持つ。(同右)

この季題論を順序づけてみると、はじめ「季題趣味」として俳句に必要な条件即ち「必ず讀込む」ものと考えていたのが、この昭和六年になると「畢竟季題を主題として詠ずる詩」にまで重要視してくるのである。そしてこの主張がそのまま晩年の「虚子俳話」にまでくり返されていくのである。

い 写生 (一)

○写生とは実際の景色を見て作ることであります。

○一つの景色でもちつと見てゐるうちには、心が澄んで来て、所謂心眼が明らかになつて来て、今まで気のつかかつたものが見えるやうになる。

○又ちつと見てをるうちには何等かの変化が自然のうちに起つて来ます。たとへば一枚の木の葉の落ちるのも、自然の変化です。

写生 (二)

○实景に接してゐますと、冥想ではとても想像のつかぬ自然の姿が目につつてまゐるものであります。その实景に接して句を作るのを写生といひます。

これらの写生論は何も虚子の独創的なものではなく、すでに子規の写生説に見られるのであるが、虚子がそれをひたすらにおし進めおし上げたことに意義がある。「实地に臨んで作るには題は必要でない」(M 23「碧梧桐宛書簡」)に最初の子規の写生的語句がうかがえるが、以後つぎつぎに写生に関して説を述べるのである。それをここに上げた虚子の論と重ねてみると

△写実の目的を以て天然の風光を探ること最も俳句に適せり(M 28「俳諧大要」)

△草花の一枝を枕元に置いて、それを正直に写生して

居ると、造化の秘密が段々分つて来るやうな気がする（M 35「病床六尺」）

△写生ということは天然を写すのである（同右）

等がある。子規在世中の虚子の写生論に

・写生とは、絵描きが鉛筆を取りて、茶碗の形より田野の光景を写生するが如く、眼に触れ耳に触るることにて面白しと感ずることは、直ちに十七字に詠じ試むるをいふ。（M 31「俳句入門」）

・写生と題詠は俳句修業の二大道途なり。写生巧なりとも題詠拙なれば、未だ完全なる俳人といふべからず。「題詠とはその題によつて種々の光景を想像するもの」「写生の如く実際の景色に束縛せられず、自由に想像を逞しく思ふ存分の句を作ることを得るは題詠の特長なり」（同右）

があるが、これも子規の

△実際の有のままを写すを仮に写実といふ。又写生といふ。写生は画家の語を借りたるなり（M 33「叙事文」）

△句作の方法として空想よりする者、写実よりする者

共に熟練せざるべからず（M 28「俳諧大要」）

と全く同一の見解であり、このことは虚子が子規の写生

説を継承していると見てよいのである。次にこの写生の目的という事に焦点をあててみると、虚子は

・俳句を作るには写生を最も必要な方法とします。

（T 3「俳句とはどんなものか」）

とし、子規の「写生という事は絵を画くにしても記事を書く上にも極めて必要なもので、比の手段によらなくては絵も記事文も全く出来ないといふてよい位である」（M 35「病床六尺」）にいう「手段」と同じとらえ方をしているが、ただ子規があくまでも写生を絵画的に解釈したのに対し虚子は

・写生といふことは、只写すといふことでなくて、作者がその景色を見てその心に映じた影を描くのである。その影は実物その物とは異つてゐるのである。

これを云ひ換へると、実物を写す場合に、実物とは異つた一つの物を造り出しそれを描くのである。されば俳句の作者は、造物者の如く、一つ一つの別天地を創造して行くのである。（S 4・8「写生俳話一則」）

と客観写生の中にも作者の主観が生きており「作者は造物者の如く別天地を創造して行く」ことをも含ませているのである。これが先述の『秋桜子と素十』の素十の作

句態度であり、虚子の推称することとなったのである。

この考えも晩年までつづき

・俳句の写生といふ事は四季の万物の相を見て、その中からある映像を取出して来る事をいふのである。万物の相といふと、万物そのものが生存してをる姿である。作者の心の働く前の姿である。が、写生とはそこに作者の心が働いて、その万物の相の中から或る一つの姿をとらへて来る事を言ふのである。(それを作者の小さい天地とでも言はうか。即ち作者が小さい造化となつて小さい天地を創造するのである)(S 30・7「虚子俳話」)

として、客観写生と作者の心とを結びつけている。これも昭和六年の「写生とは実際の景色を見て作ること」の内容を詳しく説明したものである。

(二) 花鳥諷詠

○私は俳句の目的は花鳥風月を諷詠するにあると思ひます。少くとも今日以後の俳句はさういふ標識の下に進むべきものだと思います。

○花鳥風月と一口に申しますのは、春夏秋冬四季の変遷により起り来る天然人事の種々の現象をいふのであり

ます。

○又是等を吟詠する事を花鳥諷詠といひます。

ここに虚子の言う「花鳥風月」とは俳句実作上の対象のことである。即ち素材として花鳥風月を選び詠うということが目的とされている。子規も「天然を写すのも又文学の範囲」(M 27「文学漫言」)と論じている。ここで大事なものは作者の心との関わり合いの問題である。それについて虚子は

・俳句ももとより詩である。詩は志であつて、人々が心の底に持つてゐる感情を詠ふところのものである。其点に於ては俳句といへども何等他の詩と変りはない。が唯、俳句は花鳥を假りて情を陳べる点が一特色を為してをる」(S 4・2「俳諧趣味」)

と述べているが、その「花鳥を假りて情を陳べる」という点については、昭和六年のこの論中に

・「自然現象を謡ふといふことは同時に作者の心の感動を謡ふことであります。めいめいの個性は隠さうとしても隠すことが出来ません。しかも何處までも自然現象に重きを置きます。芭蕉、一茶の如く自然現象を假りて自己の叙情をすることは致しません」

(S 6・1「俳句に志す人の為に」)

と修正され

・「私は敢て、今日以後の俳句は花鳥風月を吟詠するものである。その他には目的はない、と申しました」

(同右)

と、花鳥をそのままに諷詠するのが目的とされている。そして

・「ただ花鳥を描写するばかりではありません。その花鳥に対して起る心の糸の顫動を費びます」「表面に描写するのは感情ではありません花鳥です。感情はうちに潜んでうるほひとなり響となり調べとなつて句の上にも自ら現れます」(同右)

にあるように作者の心は結果として必然的に表われるものだと説いている。これも子規の

△「全く客観的に詠みし歌なりとも感情を本としたるは言を俟たず」(M 31「六たび歌よみに与ふるの書」)

△「只うつくしいとか奇麗とかうれしいとかいふ語を著くると著けぬとの相違」(同右)

等に見られる「花紅柳緑」説に外ならないのである。ただし、この場合も又、子規が美を楽しんだことに比べて虚子が「心」を奥に持ちちつづけている点一步深いものと

なっているのである。

こうしてみてみると、昭和六年の虚子の俳論は大体が子規の説の上に成るものであり、そのことは言葉を変えて言えば子規俳論の継承発展でもあるのである。そしてここに「花鳥諷詠と云ふことに誇りを持つ」(S 27・10「俳句への道」)と一応の集感をみた虚子の論が「一人の天才にはあきたらぬが九百九十九人の大衆済度の指導言」とも言われたことについても、虚子は「私は理論の完備といふ事はちつとも考へてをりません。只私は俳句や写生文を自ら作る上に於て客観写生といふ事を志してをります」(S 29・10「村岡籠月君に答ふ」)の如く、長年の実作体験にもとづく不動の信念とそれに裏づけられた自信とをもって対しているのである。全ての論がこのように実作者としての自信にあると言ってもよいのである。定本虚子全集(S 23、創元社刊)の俳句集には九千五百二十五句という膨大な句数が載せられており、特に昭和六年にはそれまでの年を大きく上まわる三百四十八句の多作を示している。

昭和六年にかけた虚子の意気込みがそこにも見られるのであり、そういう意味からも「俳句に志す人の為に」には大きな意義が含まれていると言えるのではなからうか。

資料図書

参考文献

- | | | |
|--------|----------|-------|
| ホトトギス誌 | 「写生説の研究」 | 北住敏夫 |
| 定本虚子全集 | 「近代俳論史」 | 松井利彦 |
| 俳句への道 | 「俳句講座」 | 明治書院刊 |
| 虚子俳話 | 「現代俳句」 | 山本健吉 |
| 続虚子俳話 | 「高浜虚子」 | 水原秋桜子 |
| 子規全集 | 「高浜虚子」 | 大野林火 |